

空手道詳説（38）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

（1）沖縄の言語

ク 琉球処分後の学校設置と標準語教育

琉球処分（明治12年、1879年）について述べないままにこの項目となり、時系列的に相前後してしまうが、琉球における言語に関して先ず話を進めなければと思うので、この際ご容赦いただきたい。ここから、必要に応じて元号を首部に置くことある。



初代県令・鍋島直彬

琉球処分によって、沖縄県が設置されて琉球王国は消滅し、沖縄県となったことにより日本の近代国家の一つに組み込まれ沖縄県庁が置かれると、鍋島直彬（1844～1915、旧肥前鹿島藩第11代藩主。在職：1879～81年）が初代県令として赴任した。

県庁職員の多くは本土から派遣されて要職に就き、現地採用の下役とともに職務を施行したが、当初は無為無策の時代と言われるほど政策らしい実態に乏しかった。しかし、沖縄人（ウチナンチュー）から日本人（ヤマトンチュー）にされた人々に対する教育だけは急務と考えたらしい。

理由として、通じ合わない言語、異なる風習や風俗を日本本土と同一化することにより、沖縄県民に日本人としての自覚を促すのが新政府の狙いにあった。

その教育の場として、三種類の学校設置で、第一は会話伝習所（後に師範学校）、第二が中学校、第三が小学校であった。会話伝習所は、通訳養成あるいは本土の言葉をはなせる小学校教員の養成を目的とした。

学校では日本語使用の励行、御真影遥拝などの天皇崇拝、忠君愛国精神の涵養をもって皇民化教育が中心テーマとなった。

とは言いながら、この時代の日本に全国的に通用し通じ合う共通語があったわけではない。沖縄県においても、新政府役人が使う地方訛りの強い言葉をもって教育の基としたのは確実である。とにかく、本土の人と話が通じ合い、意思疎通が可能なレベルのもの以外に策なかった。

ちなみに、近代日本に公的な学校教育が開始されたのは明治5年（1872年）の「学制発布」が始まりで、その時国語という教科はなく、いくつかの教科に分散していた。

第2代県令として赴任したのは上杉茂憲（1844～1919年、旧米沢藩第12代藩主。在職：1881～83年）で、上杉も鍋島と同様に教育重視と学校設置政策を踏襲した他、人材育成のため県費による留学生を東京に派遣している。



第2代県令・上杉茂憲

小学校の場合、上杉県令時代の1882年までに列島の全域に設置されたが、庶民は教育を受けないという王国時代からの旧弊による教育要求の欠如と、貧困に端を発する若年就労の必要性などが影響して就学率は進まず、更に、小学校のことを「大和屋」（ヤマトヤ）と呼び教育の必要性より押しつけとして捉える傾向が先行した。

参考までに、明治初期の全国小学校の就学率は次表のように半数止まりで、沖縄県の場合なら、琉球処分9年後（1889年）でさえ全国平均の47パーセントだったと推計されている。

【参考資料】明治13年～18年の全国学齢児童の就学率

年 度	男	女	平 均
1880年(明治13年)	58, 7%	21, 9%	41, 1%
1881年(明治14年)	62, 8%	26, 8%	45, 5%
1880年(明治15年)	67, 0%	33, 0%	50, 7%

1883年(明治16年)	59、3%	35、5%	52、9%
1884年(明治17年)	69、3%	35、3%	52、9%
1885年(明治18年)	65、8%	32、1%	49、6%

明治28年日清戦争(1894~95年)で戦勝国となった日本は、国力増強と国家統一の手段として、全国的に国語の統一が叫ばれるようになる。

沖縄県の場合も日本の一県である以上、全国に通用する言葉を学ぶことにより、県民の知識向上に不可欠という見方はあっても、この時代、県民の多くは日本の言葉は自分たちの生活を支配し脅かす異質の言語という思いの方が根強かった。

原因として、沖縄県の日本語教育は帝国主義国家への帰属と一体化であり、沖縄独自の文化、風俗、習慣の日本化と、王国時代から土着する固有の伝統に対する蔑視や抑圧による差別と、密接に結びついていると信じていたからである。

しかも、当時は未だ標準語という呼び名さえ生まれていない。

教育制度の「学制発布」(明治5年)のころから、全国共通に通用する口語教育が課題となり論議されながら、実際には、言語学者で東京大学教授の上田萬年(1867~1837年、うえだ かずとし。小説家・円地文子の父)が明治28年(1895年)に『同じ国の中でも、鹿児島県と東北地方の言葉は全く通じ合わない』など、国内共通語や仮名遣い統一の必要性を文部省に提言したのが切っ掛けとなり、漸く国語調査委員会が設置されたのは明治35年(1902年)のことであった。右の写真は、上田教授最晩年(70歳)の姿である。



標準語という名称が使われたのは明治末期からで、英語学者の岡倉由三郎(1868~1936年、岡倉天心の弟)が **Standard Language** から訳したものである。

沖縄県における標準語教育を象徴するものとして、方言を使った生徒に対し「方言罰札」という木札を下げさせるという罰則で、その始まりは1907年(明治40年)である。

しかし、この「方言罰札」は沖縄県固有のものではなく、一時期東北地方と鹿児島県でも使用されたが、戦後まで長く継続されたのは沖縄県だけである。

罰札というのは、横1寸縦2寸（約3cm×6cm）程度の木札に「罰札」と墨書されたもので、方言を使った生徒がいれば直ちに罰札が首に掛けられた。罰札を掛けられた生徒は、仲間内で誰かが同じ過ちを犯すのを期待し、その方言使用者を見つけ出し、自分の罰札を渡し、教師に届け出なければならなかった。

しかも、罰札を受けた場合、成績の素行点から1回につき2点減点されるという厳しい措置であった。素行点というのは、日常の行為行動、品行、思想に関する教師側からの評価点で、戦後の教育現場では使われなくなったが、当時、素行点の良し悪しは就職や進学などに大きく影響を及ぼす重大事であった。

罰札を受けた者は方言使用者を見つけ出し、はじめて自分の首から罰札を外す権利を得、誤った仲間の首へと罰札を移して自らは罰から逃れる。こんな仕組みは果たして好ましい素行や情操を形成できるかという、今の教育現場ではとても考えられない非人道的なことが、実際に存在したから驚愕である。

この「方言罰札」という罰則制度を一層強化されたのは、開始から10年後の1917年（大正6年）で、沖縄県立第一中学校長に赴任した山口沢之助で、「方言取締令」を発したからである。

しかし、「方言取締令」へ反発する心根を持つ生徒たちによって、かえって校内での方言使用が盛んになり、校門には次々と反発歌が張られるようになった。その一例として、

『大和口 札取る毎に思うかな 方言の札はやめ沢之助』がある。

また、沖縄史研究家で後に「那覇方言概説」を著した金城朝永（1902～55年）は、わざと違反を重ねて罰札を集め、素行点減点増加によって特待生から落第生へと扱いが変わったという。

1940年に那覇を訪れた宗教哲学者で思想家の柳宗悦（やなぎ むねよし、1889～1961年）ら日本民芸協会（柳が会長）の一行は、方言罰札を使った方言取締りを強く批判したという記録がある。柳らは方言のもつ文化的価値を力説し、標準語の一方的な励行は将来に禍根を残すものであると主張した。

これに対し沖縄県学務部は、県民は標準語がまともに話せないため多大なる不利益を被り、劣等感を抱く基となっていると事例をあげて反論し、方言をいたずらに重視するのは学者、文化人の現実を無視した手前勝手な主張にすぎないとやり返している。

論争の舞台は当初沖縄の新聞であったが、やがて東京の中央論壇をも巻き込み、標準語、国語と方言の関係を問う一大論争にまで発展した。この論争は単に言語政策の是非を問題にただけでなく、沖縄における近代化と伝統文化の対立の問題をも取り上げたところに意義があった。

この沖縄文化と方言との論争は、明瞭な形での結論は出なかったが、当時の日本は挙国一致体制で戦争を押し進めていた時期であったため、標準語励行運動はむしろ強化へと向かった。



日本民芸協会会長・柳宗悦

一方で、沖縄県における方言撲滅運動は、徴兵制、国内外への出稼ぎ、移民政策と無関係ではなかった。それぞれの場において、標準語を話せないことによる差別を受け、生活スタイルも同様に対象とされたからである。

それに、方言をなくす運動は単に差別から逃れる手段だけでなく、戦時体制強化の押しつけとなった。

太平洋戦争末期の1945年3月沖縄戦が始まると、民間住宅にも多数の日本軍が駐留した。情報が洩れるのではないかと懸念した日本軍は、『方言を使用する者はスパイとみなす』と県民の方言使用に厳しい圧力を加え、沖縄戦の最中に悲惨な事件も発生したことを特記しておきたい。

標準語励行運動に関し 方言論争にみられる柳宗悦らの指摘は、むしろ戦後になってから再燃し、日本本土における沖縄県民蔑視問題や、沖縄側の安易な本土追随の姿勢を反省させ、沖縄の人々に沖縄文化の豊かさを再認識させる切っ掛けとなったことに筆者は共感を抱いている。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行

- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行